場所とコーラ

山内得立

一

西田哲學の「場所」はプラトンの「ティマイオス」篇のコーラの思想に端を發してゐることは周知のことであるが、我々はそれらが互に如何に近く、また如何に原理的に異るかを明かにすることによつてこの哲學の理解に資するとともに先生の人格を偲びたく思ふ。プラトンは「ティマイオス」の五二aにコーラ（χώρα）または永遠なるコーラ（χώρα ἀεί）について論じてゐる。それは次の如き手續きからであつた。先づ第一に不變なるイデアがある、それは不生にして不滅であり、外部から何ものをもうけず、また他なる何ものにも行かず不可視であり如何にしても感知せられないものである。第二はこのイデアに從つて名づけられ、それに似たものであるが、しかし感覺的であり、生成し、たえず運動し、或る場所に現はれてはまたそこから消えゆくものであり、感覺を伴つたドクサによつて把握せられるものである。第三に永遠なるコーラがあり、それは破滅をうけず却つて生成する凡てのものに對して場所を提供し、感覺なしに一種の私生兒的ロゴスによつて把握せられ、むしろ信ぜらるべきものである。それについて我々は夢みながら云ふ、「凡て有るものは或る場所に於て存在し、何らかの場所を占めてゐないものはない、天上にも地上のいづこにも存在しないものは要するに無である」と。プラトンのコーラはそれ故に生成の概念に發源してゐる。所謂前期の思想に於ては存在はイデアに限られ、これと區別せられたる生成の世界は存在の名に價しないものであつたが、「ティマイオス」に於ては却つて生成するものが具體的なる存在と考へられるに到つた。そして感覺的なるものと生成せられたるものとを說明するためにプラトンはイデアの外にコーラを想定したのである。しかしコーラとは果して何であるか。イデアが存在のイデアルなる要素であるに對して夫は一種のマテリーであると考へられ、人はこ

れをプラトンの第一のマテリアと名づけることに慣はしてゐる。ところがベックはこれに反對して「プラトンは世界創造について何ら永遠なるマテリアを、否一般にマテリアといふものを立ててゐない」(Böckh; Über die Bildung der Weltseele im Timäos des Platon, S. 26)と論じてから、コーラがマテリアであるか否かについて多くの議論が戰はされた。尤もベックもプラトンは生成を說明するためにイデアの外に尙第二の原理を設定したことは認めてをり、それは疑ふべくもなく明かなことである。彼の反對するのはこのコーラが一般にマテリアと呼ばるべきものでなく、況やアリストテレスによつて考へられた ὕλη とは全く異るといふことである。しかしそれが何であるかを決定する前に「テイマイオス」に於てそれが如何に說かれてゐるかを先づ吟味して見よう。感覺の世界は或ときはかくの如く、他のときは他の如くあつて決して同一でなく、同樣でさへもあり得ない、一は他のものではなく、またこれらの兩者でもなく、それらの現象形態はたえず移り行き瞬時も止ることがない。しかしそれらがかくの如く現象し又は他に移るためにはそこに何らかの移らざるものがなければならない。それらがそこへ入り來り、またそこから他に移りゆくところのいはゞ基體的なるものは、事物のそのもの (τοιοῦτον) であつて事物のかくあるところのもの (τοιοῦτον) ではない。しかしそれと同時にこのものがそれ自ら何かの自體性をもつてゐるならば、それに於てかくの如く多くの事象を現はすことができないからして、この基體的なるものはそれ自らとしては全く空虛であり、そこに自性があるとするならばたゞ受容的であり、多くの事象をそれに於て存在せしむる或ものであるにすぎない。イデアを父とするならばコーラは生成の世界に對しては母であり或は「乳母」である。それはイデアの如く永遠ではないが、それと類似する程度に於て凡ゆる感覺から離れ、非感覺的なる或種の推理によつてのみ把握し得られるものである。生成も發生も或ものにその反對のものが取つてかはることであるから、互に相反するものが相次いで生起するためにはこれらをそこに於て生成せしむべき何ものかがなければならない。このあるものが卽ちコーラであるが、それはその限りに於て凡てを受け容れるためにそれ自らは如何なる規定をも持つことはできない。恰も香水を製するにはまづ完全に純粹なる水が、いかなる匂も味もない純粹なる水があつて、それが與へられたる芳香を受け容れるべきであるやうに。

かくの如き第三の或ものをプラトンは同じ對話篇の別のところでは、場所（χώρα）座位（ἕδρα）個處（τόπος）と名づけ、また時としては必然性（ἀνάγκη）とよんでゐる。此等の言葉は一般に空間的なるものを意味するからコーラは卽ち空間であり場所であると考へられた。殊にベックーが之を稱へ、ツェラーがこれを大成しボイムカーがその「ギリシア哲學に於けるマテリーの問題」に於て周到に論じてからこの說は今日の學界に於て殆ど定說となつた觀がある。ところがアリストテレスはその「プイシカ」第四卷第二章二〇九に於て「プラトンはティマイオス篇に於て質料と場所とは同じものだと云つてゐる」と傳へてゐる。質料がコーラと同一であるといふことはこの或ものがコーラとして解せられる以前に既に質料として把握せられてゐたことを言表はしてゐるとも見ることができるであらう。且つプラトンは場所とか座位とかいふのは全く譬喩的な意味に用ひ、質料が無差別にあらゆるものを受容れる點を特に空間的なるものになぞらへて說いたのである。この點から今日に於てもコーラをプラトンの質料として解釋しようとする人が跡を絕たない。例へばブロシャールも次の如く論じてゐる。コーラとかトポス等のどれ一つをとつて見ても我々近世人が空間と呼んでゐるものに當嵌まらない。近世人の空間はアリストテレスに於ては「個處」に應ずるものではなく「空虛」（τὸ κενόν）卽ち絕對的非有又は虛無にあたるものである。且つアリストテレスの精神論の語から考へてプラトンもその後に出たアリストテレスも決して空間を以て質料を說明したのではなく、逆に質料を以て空間を說明しようとしたに相違ないことがわかる。質料は相反するものがそこに實現を見るべき敷地乃至その戰場であるともいへよう。實際戰鬪狀態が質料の常況である。我我は空間を絕對的に不活潑なものと表象するが、プラトンは質料を絕えず活躍してゐる狀態の下に表象する。質料を定義することのできないのは、その虛無なところにあるのではなく、專らその不安定なところに原因してゐる。ここに黃金の塊がある。之に三角形四方形等種々な形をとらせるとせよ、ところでこれらの形は一として存續しないものであるから「これは三角の金だ、四角の金だ」と云ふことはできない、精々云つて構はないのは「これは金だ」といふことだけである。質料の本質は絕えず顯れ絕えず消え去ること、連續的震動に常に搖さぶれること、凡てを受容れることにあるから上述のことは質料についても云へる。且つ他方に於て質料はそこに入

らうとするものに抵抗し、その抵抗を動搖及び運動によつて現はしその運動は休なく終りないことを知つてゐる。かう解釋して見ると質料は空間どころかもう少しで空間と反對になる位である。近世哲學に於ては絶えて空間に「原因」の名を與へようとした者はない。ところがプラトンは質料を「さまよへる原因」(πλανωμένη αἰτία)と呼んでゐる。とにかくプラトンの質料は容易に空間と混同される譯には行かない」云云。(プロシヤール、プラトン哲學に於ける生成、河野譯、二三—二五頁)

しかし我々は以上のプロシヤールの解釋にも遽に贊同することができない。彼は近世哲學に於て空間を原因と名づけた人は絶えてないといふが、それは近世的に考へられた空間であつて必しもプラトンの空間ではなかつた。コーラは單なる空間ではなく、場所であり、座位であり、特定なる個處でなければならない。プラトンを目してデカルトの先驅者と做すことは不可能であるが、プラトンをして場所を「さまよへる原因」と考へしむることは必ずしも不可能事ではなかつたはづである。質料は分量的見地から考察することはできず、たゞ凡ゆる定つた性質の否定と見る他に仕方がないと云ふのは正しいが、それ故に場所を機械的に分量的に見ることは正しいとはいへない。近世の空間はたとへさうであつてもプラトンの場所は決してさうではなく却つて性質的なのである。場所は空間的であるが、それ故に近世に於て考へられるやうに分量的でもなく、またカントに於てのやうに認認の先驗的なる形式でもなかつた。プラトンにとつて場所とは單なる空間ではなく、一定の位置を占め、定つた意味をもつ座席であつた。勿論それが存在の於てある場所である限り、特定なる性質と情況とからしては純粹でなければならぬがしかし場所は決して抽象的なる空間概念でもなく先驗的なる空間形式でもない。それは必ず一定の場所であり、何らかの位置でなくてはならない。場所の特性は空間の如く靜止に於てではなく、却つてたえず反對のものによつて搖ぶられる動性に於て見出されるのである。それがそこにあるといふのはそれに於て或一つのものがたえず他のものによつて取つて代られ、事物が生成することを可能ならしむる地盤となるところにあつた。場所がさまよへる原因となるのは、空間が原因であることと同一ではなく、それが近世の哲學者には封じられてゐても、プラトンには斷じて禁ぜられてはゐなかつたのである。

プラトンのコーラに單なる空間以上の或ものを認めよ

うとする論據には尙次の如きものがある。プラトンのマテリーは性質的には不定であるが、しかし何らかの物的實體（Körperliche Substanz）である。それはたえず變化するものの根柢に横はるところのそれ自ら變化しない或る實體である。それはその中に多くの形相を受容し得る可構成的材料でなければならない、例へば金が凡ゆる形態をとり得べき材料的なる塊體であるやうに。

マテリーが何らか積極的なる內質をもつてゐないならばそれは實在性に於て單なる現象界に墮してしまはねばならぬであらう。何となれば現象界がそれにふさはしい存在性を有するのはイデアを分有することによつてのみ可能であるが、マテリーが若しそれ自らの實有性をもつてゐないとすれば凡ゆる存在性を失ひ、單なる假象の世界に深く陷沒しなければならない。しかるにマテリーには一種の存在性が附せられてゐる。それはたえず變化する假現の世界ではなく、却つて此等の現象の根柢にあつて常に殘基的にそれ自らの存在性を維持しつゞけるものとして描かれてゐる。さらにそれは單に現象界に對して一層高い存在性を保有するのみならず、イデアに對してはそれと同等でないまでもそれに類似した程度に於て存在性をもつとのべられてゐる。マテリーはイデアとは別の意味に於てではあるが、イデアと同樣に感覺によつてではなく專ら推論的なる——たとへそれは私生兒的なるものであるにせよ——働きによつてのみ把握せられ得るものなのである。「テイマイオス」に於ても質料に對してエイドスの名をプラトンは與へてゐる。例へば五一、a に於て「それは眼に見えない、定形のない、凡てを受容れ、極めて困難な理解し難い仕方に於て叡智に參與してゐる或る形相」だと明言してゐるのである。マテリーが感覺的には見られず、叡智によつてのみ知られ得るものであるとするならば、それは或程度に於て少くともそれ自ら獨立なる存在性をもつたものであつて決して空間の如き空虛なる非有ではあり得ない。のみならずそれがたとへさまよへる不定なものであつても、事物の生成の原因であるからにはそれ自らに於て何らかの力能を具備してゐなければならぬ。

しかし以上の所說に對してはボイムカーも周到に評論したやうに（同書一五八—一七六頁）それぞれ反對の議論を立し得るであらう。我々は今一々に亙つてそれ等をたどる遑はないが、ボイムカーも指摘してゐるやうに、種々なる現象とその根柢に横はるところのものとの關係は決して屬性と本體との關係ではない。それをさう解釋

するのはアリストテレスの立場からであつて、プラトンのあづかり知らざるところである。なるほどプラトンもこの或ものを例へば金塊の如き可構成的な塊り（ἐκμαγεῖον）であると言つてゐるが、この比喩は質體性の中にあるのではなく、むしろ何ものかを受容し得る可能性についてのべられてゐるのである。アリストテレスの可能性は一つの力であり、それと形相との結合によつて現實となり得る或ものであるが、プラトンの可能性はたゞそれに於て次々に形相の入れ代る容器にすぎない。換言すれば前者にとつてそれは物體の可能性であり、いはゞ一つの基體であるが、プラトンにとつては單なる可能性であつて可能的なる物體ではあり得ない。このことを最も明晰に區別するものは多くの人々によつて――たとへ質料說をとる人々によつてさへも――認められてゐる區別、即ちアリストテレスのマテリーはそれから（ἐξ οὗ）事物の生ずべき質料であるが、プラトンの質料はそれに於て（ἐν ᾧ）事物の生成すべき地盤であるといふことである。バスフロインドはこのことを十分に認めながら、尙この「それに於て」を單に內屬の關係に限らうとしてゐる。（Bassfreund; Über das zweite Princip des Simlichen oder die Materie bei Platon, s. 43）しかし前にも云つたやうに、プラトンではこのものとかくの如きものとの關係は決して本體と屬性との關係ではない。それは內屬の關係としては理解し許され得ぬものである。プラトンに於てはそこに絕えず移り代るものは單に形相であつて、アリストテレスに於てのやうに形相と質料との結合（συνολον）ではなかつた。

次にプラトンは質料に對して、現象界に比べてより高き實在性を與へたといふことも必しも眞ではないのである。さきにブロシヤールによつて引用された「テイマイオス」五一頁aも「それは眼に見えない、定形のない、凡てを受容れ、極めて困難な、理解し難き仕方に於て叡智に參與してゐる或る形相」だといふ語も必しもそれが一つの形相であることをではなく、あるものの一つの種類（εἶδος）を言表してゐると解することが穩當のやうである。それが叡智に參與してゐることはたゞ我々の感覺から遠ざかり、感性的には捕捉しがたきことを意味するにすぎぬであらう。マテリーは感覺に比してたしかに持續的であり、不生的であるが、しかしそれ故にその存在性に於てより高いといへるであらうか。それはロゴスによつてのみ知られるものであるが、そのロゴスは認識の正系に出たものでない、いはゞ私生兒的なるロゴスによつ

て推量し得るのみである。若しそれが何らかの實在性を有し、形相に近いものでさへあるならば我々の正しきロゴスによつて十分に把握し得られるものでなければならぬ。それが單に傍系的なる認識によつてのみ知られるのは、それがそれ自らの實在性に於てあり得ないことを示してゐる。それは我々にとつて極めて把握し難きもの（δυσάλωτον 51 B）であり、殆ど信じ難きもの（μόγις πιστόν 52B）であり、甚だ難澁にして明かならざる種族（χαλεπὸν καὶ ἀμυδρὸν εἶδος 49 A）であると記載せられてゐる點から見ても、少くともその存在の形態の不明なる、そしてそれ故に存在性に於て十分ならざるものであるといはねばならぬであらう。プラトンの質料は不定にして何等の性質をもたない物體ではなく、却つて凡ゆる物體をその中に受容れる不定性そのものであり不定的なる或ものである。その不定性は空虛なるが故にではなく、不安定なる點にあるといふことが正しいとしても、それ故にそれが何らか本體的なるものでなければならぬとは言へない筈である。なぜなら不安定なるものはそれが絶對にさうである限り存在性に於ても不定でなければならぬ筈であらうから。

プラトンのコーラを場所と解することに對する反對は、場所を單に空間的なるものと解することに原因してゐる。然るに場所は必しも空間ではない。空間は空虛であり、限界なきことを特色とするが、場所は必しも空虛でなく、況や非存在ではない。却て場所はそれ自らの內容をもち、常としてその意味を擔つてゐる。場所は單に一般的なる空間ではなく、必ず區切られたる、一定の限界をもつた空間でなければならぬ。この部屋は單なる空間ではなく、勉强のための書齋である。殿堂は神にさゝげられたる聖域であり、劇場は演劇のために特にしつらはれたる場所であるべきであらう。トポスといふ語もアリストテレスの「トピカ」に於て用ひられたやうに、人々のとるべき觀點であり、そこからして凡ての論題の處理せらるべき立場を意味してゐる。ヘドラも一定の座位を示し、そこに据ることによつて地位、名分を決定すべき特定の場所でなければならない。ギリシア人にとつては空間も時間も單に抽象的なる一般者ではなく、また無內容なる形式でもあり得なかつた。彼等はこれらを考へるに單なる空虛又は非存在をもつてするには堪えぬ程に直觀的であつたのである。例へば時間も區切られたる具體的のものでありその時間內に於て占ひの行はるべき特定の合間を意味するものであつた。空間とか時間とかは單に空、また

は虚ではなく常に一定の間を伴つてゐることも注意せらるべきであらう、一定の間をもつ空間は卽ち場所でなければならぬ。プラトンのコーラは空間ではなく、――この點に於てそれを單なる擴がりと解するボイムカーの說とも我々は一致することができない――場所でなければならない。アリストテレスの傳ふるやうに、プラトンが質料をコーラと同一視したのは、それを空間としてではなく、場所として理解したものであるといふべきであらう。さうしてそれをさう解釋することは質料說と空間說との執れに對しても正當なる批判を與へるとともに恐らくはプラトンの眞意に近きものを擧揚する所以ではないかと思ふのである。

二

かつてアリストテレスは「すべての人々は場所が或ものであると語つてゐるのに、プラトンのみはそれが何であるかを述べることを試みた」と云つた（Phys. IV. 209b）。それは單に「場所」についてのみでなく、凡ゆるものについて取つたプラトンの態度であるが、場所の何であるかがプラトンによつて明かにせられたとすれば、アリストテレスの究明したのは場所の何についてであつたであらうか。ギリシアの哲學に於て始めて空虚なる空間の概念を導入したのは、デモクリトス又はレウキッポスの如き原子論者であるが、彼等は存在の多數性と運動性の可能なるために原子の外に、空虚なる或ものが一つの實體として存在すべきことを主張したのである。アリストテレスの攻擊したのは第一にこの意味の空虚なる空間であつた。空虚な空間は何處にも存在しないにも拘らず、多くの人々が空虚について語るのは何故であるか。それは例へば瓶中に初めに水があり、次に空氣が入れ代るとき此等の物質のそれぞれ占むべき場所として空虚なるものが考へられるであらう。少くとも場所の概念は空虚なる空間の前にある。「何となれば空虚とは物體を缺いた場所であるから」（Phy. IV. 208b）。アリストテレスの研究しようとしたのはやはりこの意味の場所についてであつた。それは空間ではなく場所であつたのである。この點に於てアリストテレスはまさしくプラトンの弟子であつたといふべきであらう。しかしアリストテレスの場所はプラトンのそれと同一であつたか、またはさうでないとすれば如何なる點で異つてゐたか。

先づアリストテレスにとつて場所とは事物から離れそれとは獨立なる一つの實體ではなく、事物そのものの大さであり、或は事物の擴がりでなければならなかつた。

ところが事物の大さとその擴がりとは必しも同一ではない。大さは幾何學的性質であるが、擴がりは事物の質料的なるものに屬してゐる。數學的なるプラトンが前者の立場に於て見たに對し、生物學的なるアリストテレスが場所を主として後者の見地から把握しようとしたことも固よりその所であつたであらう。場所が事物から離れて存在し得ないのは、それが常に事物の場所であり、そしてそれがさうであるのは場所が事物の質料の延長する限りに於て存在するからであるに外ならない。アリストテレスがプラトンのコーラを質料と同一視したのも――「テイマエオス」に於てプラトンはさう論じてゐると傳へたのも恐らく彼のこの特殊なる立場から解したが故であつたにちがひない。

場所と物體とは同一ではないが、場所は物體の本性と無緣なものでなく、物體が延長を本性とするならばそれはまた場所をも本性とするのである。プラトンにとつては場所とは事物の、於てあるところのものであつたが、アリストテレスにとつてはそれは物體のよつてもつて存在するところの或ものであつた。事物は何らかの場所に於て存在すると考へるのがプラトンの立場であるが、事物は何らかの形態をとることなしには存在し得ないと見ることがアリストテレスの哲學である。アリストテレスにとつては事物が何らかの形態をもつことなしにはあり得ないといふのは、事物が何らかの場所を占むることなくして存在し得ぬことと同意味であつたのである。

しかし以上の如き場所の教説には種々なる困難が伴はれる。例へば點は延長なき或ものであるが、それ故に存在しないといへるであらうか。點も一つの存在であるからには何らかの形をもたねばならぬが、形とは延長であるならば延長なき點は形なきものでなければならない。從て形なき點は場所をもたず、點と點の場所とはそれに於て區別することができない。シンプリキオスも論じたやうに、若し點と點の場所とが區別せられるならば、この二つのものが不可分な點の中に置かれることになつて(Simplic. in Phys. ed, Diels 531) 不合理となる。點はその場所をもつてゐない。場所をもたざるものは從つて形態なく存在し得ないことになる。點は果して存在ではないであらうか。しかしこの疑問は次の如く解釋し得られるであらう。場所とは物體の大さ、または擴がりでなく、物體がそれによつて包まれるものの內側の境界であり表面である。アリストテレスは茲に於て場所の第二の定義に達した。しかしこの新しき第二の定義と前の第

一の定義とは決して無關係ではなく、況や矛盾するものではないのである。それについてやゝ詳しく述べよう。

「プイシカ」第四章二一二a にアリストテレスは次の如く論じてゐる。「かくて場所は上述の三の孰れでもないとすれば、即ち形相でもなく質料でもなく、また移動する事物の擴がりから獨立な常住に存在する擴がりでもないとすれば、場所は必然に上述の四つの中殘つたもの、即ち包む物體の境界（τὸ πέρας τοῦ περιέχοντος σώματος）でなければならない」と。こゝでアリストテレスは四つのものを區別してゐる。第一に場所が形相や質料と極めて類似してゐるために、多くの人々は、場所とは包まれた物體に特有なる或もの、質料又は形相であると考へやすい。思ふに場所は形相の似像として物體を包んでゐる。また場所は質料と一層親似な關係をもつてゐる。何故ならば場所は質料と同樣、種々なる變化のその中に行はれ得べき云はゞ公共の舞臺であつて、それに於て白色が黑色に、軟さか硬さに變ずるからである。場所が大さの擴がりであると考へられる限り、それは質料である。何となれば大さの擴がりは大さと異つてをり、擴がりは形相、例へば限定する平面によつて圍まれたあるものであり、形相が限定するものであるとするならば質料は限定されるものである。そして大さとは恰もこの形相面に相當し、擴がりとは限定さるるものの質料面に當つてゐる。尤も擴がりにも二の意味があり、一は限定のみを受取るもの、二は限定並に屬性をうけとるものであるが單に前者の意味にとれば空虛な空間が考へられる。ところが、アリストテレスは恰も幾何學的性質と自然學的性質とが區別せられ得ないかの如く、擴がりとは限定と屬性とを受取るものであると考へてゐるやうであるから、此意味に於ける擴がりとは即ち質料であると思惟することも容易である。「テイマイオス」に於てプラトンが質料と空間とを同一視したと云つたのもかかる見地から見てのことであつたらう。

アリストテレスはしかしかゝる見解を大なる誤謬として斥けた。即ち場所は形相でも質料でもないことを次の如く論じてゐる。一、場所が形相又は質料と同一視されるのは場所を所有するものとしてであつても場所そのものとしてではあり得ない。場所は物體の部分でもなく又その性質乃至は狀態でもなく、全く物體から分離されたものでなければならない。第二にもし場所が質料又は形相であるとすれば、各々の物體がそれの特有の本性的な場所に向ふといふことは如何にして可能であるか。場

所とはその中に於て物體が運動し、またそれへ向つて物體が運動して行くものでなければならぬ。しかるに物體は自己の中で運動し得ないし、またもし自己自身の中に上下の差別を有するとすれば、本性的な運動によつて上或は下へ向ふといふことも出來ない。從つて上下の差別と運動の場面とは物體の外に樹てられなければならぬ。それ故に場所は質料及び形相の外部に存すと考へられねばならない。第三に、もし場所を物體の內部に置くとすれば、場所は物體と共に運動する。從て場所は場所を變ずるであらう。しかし場所が既に場所を占めてゐるのでなければ、場所は場所を變じ得ない。ところが場所が場所の中にあるといふことは不可能である。それ故に場所は物體の內部にあることができない、と結論しなければならぬ。第四に例へば空氣から水が生ずる場合に空氣の大さは減じる。若し場所が質料及形相だとすればこのとき場所の或ものが減ずるわけである。場所が形相であるとすれば、水が空氣から生じるとき、空氣の形相が消滅するから場所の或ものも消滅すべき筈である。しかし一體場所の消滅とは何を意味するのであるか。それ故に「かく考へてくると、場所が質料又は形相であるとすれば、場所とは何であるかを知るのが困難となつてくる」（ブイシカ、二〇九b）とアリストテレスは結論する。

次に場所とは空虛な擴がりであると定義せられ易いが、この說も誤つてゐる。アリストテレスによれば空虛な擴がりといふやうなものは絕對に存在し得ない。空虛な擴がりを打立てる人は、それを原子そのものの間に介在せしめて物體の連續を打破したデモクリトス一派の人か、空虛を物體界の外部に樹てたピュタゴラス派の人々であるが、一體擴がりといふのは物體を離れて存在し得ず考へられも得ぬものであつて況や空虛そのものは物體とは獨立にあり得ぬのである。その中に何ものも存しないものは空虛と呼ばれる。何ものも存在しないとは如何なる物體も存在しないといふことである。物體とは觸れられ見られ得るもの、從て重さまたは大きさをもつたものでなければならぬ。原子論者は物體は空虛な空間の中でなければ運動しないと考へるのであるが、例へば魚が水中に運動する如く、運動には必しも空虛な空間を必要としない。水は擴がりをもつてゐるが空虛ではない。空虛といふことと擴がりとは直接には結びつかぬ。擴がりは空虛でないのみかその反對である。何らかの質料なしには擴がりは不可能であり、何かの質料のある限りそれは空虛であるとはいへない。空虛な擴がりをそれ故に物

體の外に、それとは獨立に、それに先立つて考へることは誤りであるといはねばならない。

以上の如く場所について三つの誤謬を斥けた後にアリストテレスは第四の、それのみが正當であると思はれる場所の定義をもちだした。それが前述の第二の定義であるが、繰返して云ふならば、場所は形相でもなく、質料でもなく、また物體を除去した後殘存すると思はれた空虛なる擴がりでもなく、物體の場所とは、それによつて物體が包まれるところのものであるといふのである。詳しくいへばアリストテレスは第一に質料、形相、擴がりのやうに包まれた物體に存するもので場所の本性に無緣なるものを凡て排除した。次に包むものに存するもので、包まれた物體の特有の場所と無關係なる一切のものを排除した。そして第一の排除の系列により、包まれた物體の外的な形または境界へと導かれ、第二の系列からして、包むものの內表面へと導かれた。しかし物體の境界は物體と共に運動するが、場所は場所を變し得ないが故に、最後に包まれた物體の境界をも排除した。その結果そこには事物の境界、卽ち包まれた物體が接觸する、包むところの或ものの內表面だけが場所として殘ることとならざるを得ない。かくしてアリストテレスは場所とは包むものの內側の境界であり內表面であるといふ定義に達したのである。

この定義は我々にとつても極めて示唆に富むものであるが、アリストテレスの云ふ所をもう少したどつて眞意を掴むことに努力しよう。先づ包むものと呼はれるのは何であるか。普通には物體はその部分を包まれたものとして保つから、全體は部分を包む、部分は全體の物體によつて包まれてゐると考へられる。しかしアリストテレスは場所がその內に位置するものを包むことと全體が部分を包むこととは同一でないと考へる。若し包むものと包まれるものとが連續的であれば全體は部分を包み、もし包むものと包まれるものとが接觸的であれば場所はその中に位置するものを包むといふのである。卽ち場所が物體を包むといふのは場所が物體と連續的でなく、接觸的である場合に於て可能となるのである。それでは接觸的とは何であるか、またこれに對する連續的とは何を云ふのであるか。アイシカ第六章二三一aには「連續せるものはそれらの端が同一なるものを云ひ、接觸せるものとは端が同處にあるものを云ふ」とある。換言すれば接觸とはそれらのものの互に觸れる端が同じ場所にあり共に存在するが、しかし互に分離してゐるか又は少くと

も思惟によつて分離され得るものを云ひ、これに對し連續せるものはそれらのものの端が存在し始めたり、存在し終つたりすることなく互に融合し同一物と思はれるものをいふのである。かく考へて來ると包むといふことは物體が包まれる物體と接觸してゐることであり、接觸には兩端が互に分離しながら共に同一の場所にあることを意味してゐる。この場合かくいふことは場所を定義する前に既に場所を――同一の場所といふ如き――前提してゐるのではないかといふ疑も生ずるが、しかし同じ場所にあるといふことが悪ければ共存といふ語を用ひてもよいであらう。それよりも重大なことは、もし物體の部分は互に連續的であり、物體はそれを包む物體と接觸的でなければならぬとすれば、物體には場所を許容するが、部分には場所を拒否することにならないかといふ疑問である。これに對するアリストテレスの答へは次の如くである。ものが場所を有する仕方には現勢的と潜勢的との二の樣式がある。物體そのものはそれを包むものに接觸してゐるから現勢的に場所を有する。例へば堆積された穀物の粒は他の粒に接觸ししかも分離的に存在してゐるやうに、部分が全體の内に包まれつつ他の部分と連續せずして接觸してゐるならば、その部分は場所を現勢的に有してゐるのである。しかし本來の意味で部分と呼ばれるもの、卽ち互に接觸しないで連續するものは場所を現勢的にではなく單に潜在的に有してゐるにすぎない。若し物體が碎かれて各部分が分離するならばそれらは直に場所を現實的に有するであらう。しかし物體の中にある部分が互に連續して結びついてゐる限りそれらの部分は全體に於ける部分として物體の内に存するものであつて、場所の内に位置するものとしてそれぞれの場所をもつてゐるのではない。

しかし連續と接觸とを以上の如く明別することは觀念的には容易ではあつても經驗的には仲々困難である。もし世界が、その内の一切のものが靜止してゐるといふ在り方のものだとすれば、接觸と連續とを區別し得る何等の徵表も見出されないであらう。しかし或ものは靜止し或ものは運動してゐる、そして連續せるものとは一方が運動すれば他方が必ず運動するものを言ひ、接觸せるものとは、一方が靜止してゐても他方が運動し得るものであり、更に兩者とも動かされても各々が自由にそれぞれの方向へ運動するといふやうな聯關を互に持つものをいふのである。それ故にアリストテレスが「もし場所運動が存在しなかつたならば、場所について探求されなかつ

たであらう」（プイシカ二一一a）といつたことの意味も明かとなつてくる。また「場所は包むものの境界でなければならぬ。包まれるものとは運動するものである」（同二一二a）といふ意味も了解せられ得るであらう。そして場所とは單に他のものを包むものではなく、他のものの運動を自らの中に包むものであり、しかもそれ自らは運動しないものであるといへば一層適確なる場所の定義となるわけである。恰も瓶は或は水を或は空氣を或は酒を容れることが出來、これらの物質はたえず運動するが瓶そのものは不動のままに止つてゐるやうに。

しかしこゝにも難問がある。場所が包まれるものの最外端であり、包むものの最内奥の境界であり、しかも包まれるものが動くものであるとすれば、場所は動く物體の動きによつてたえず變化し、從つて場所そのものは不動でなく却つて常動でなければならぬではないか。アリストテレスは「從つて、包むものの、不動の、第一の境界（τὸ τοῦ περιέχοντος πέρας ἀκίνητον πρῶτον）これが場所なのである」（プイシカ二一二a）といつてゐるがこの境界は果して不動であるべきであるか。ところがその困難は實をいへばアリストテレスの場所論の根柢に既に横つてゐたのである、何となれば場所は一方に物體の連續ではなく接觸であると考へられる限り包むものと包まれるものとは互に分離してゐなければならず物體が場所を所有するには場所から離れることが必要だといふことになるが、また他方には場所は物體を包む境界である限り物體に追從し物體が運動する限り境界も從つて動くべきだと考へられるからである、この困難は如何にして解決せらるべきであるか。

先づアリストテレスの第一の場所といふのは包むものの内面であり、それは物體と連續はしないが接觸してゐるから、それが物體の運動に追從して動くものであると考ふべきであらうか。それは包むものの内表面であり、包まれる物體の外表面ではないからして物體の擴がりと同一ではないが、しかしそれが物體に接觸するものである限り物體の外面と等しきものでなければならぬ。しかしアリストテレスにとつてはこの第一の場所の外に云はば共通の場所ともよばるべきものがあつた。このことは次の如き考をたどることによつて明かにせられるであらう。場所が包むものの境界であるとすれば物體はそれぞれ境界によつて接觸するから場所はこの境界に應じて層をなしてゐる。例へば部分的なるものは全體に包まれてゐるが全體はさらにこれを包む或ものに對して境界をも

つてゐる。水は容器の中にあるが容器は家の中にあり家は土地の上にあり、かくして最後には宇宙の全體がある。この宇宙の外にさらに他の宇宙があるか否かは問はないにしても宇宙がかゝる階層の最後のものたることは論を俟たぬであらう。それ故にアリストテレスは宇宙を共通の場所（τόπος ὁ κοινός Phys. 209）として考へた。さて第一の場所はそれぞれ特有なる物體を包むが故にその物體と運命を共にするが、宇宙全體は他によつて包まれるものではなく、專ら包むところのものであるが故にそれ自らは不動である。その場所は種々なる物體の運動に拘らず不動であり、嚴密にいへば動すべき場所をもつてゐない。プイシカ二一二b にも「けだし天體のすべての部分は或意味で場所の内に存在する。圓に於ては一の部分は他を包むからである。それ故上方の部分は圓運動をなすが、宇宙は何處かの場所の内に存在するのではない」と記されてゐる。實際天體の外部には物體も空虛も空間も全く存在しないことをアリストテレスは多くの論索を費して斷定してゐる。宇宙は全體の全體的なるものであるからして場所を所有することなく、いはゞ場所そのものである。それは種々なる場所のさらに存在すべき共通の場所であつた。そして共通の場所は第一の場所に對して云はゞ場所の場所たる役目を果してゐるのである。かう考へてくると場所がさらに場所の中にあるといふことも不合理でないのみかむしろ場所的なるものの本性を云ひ表してゐるのである。アリストテレスは第一の場所の概念によつて場所を物體の擴がりと見る思想から自己の立場を區別し、宇宙を共通の場所と見ることによつて無限のパラドツクスからも免れ得ようとした。場所とは決して物體の擴がりではない。もしさうならば場所は質料と同一となるのみでなく、物體が場所に於て存在し、または運動するといふことも不可能にならねばならぬ。なぜなら擴がりは質料なしに考へ得ないし、運動は物體以上の空間に於てでなければ可能でないからである。アリストテレスは場所を物體の擴がり、または物體そのものの境界とは考へないで、物體を包むものの内表面と考へた。次にこの包む包まれる關係を無限に考へて共通なる場所の思想に達した。無限とはたゞ限界なく定形なきことではなく包み包まれる關係に於てのみ成立し得るといふのが彼の結論のやうである。無限を單に限界なく境界なきものとして把握するならば必ず二律背反に陷らねばならぬ。アリストテレスにとつては宇宙の外にこれを包む宇宙はなく、從つて宇宙は專ら包むものとし

て具體的なる世界を形作つてゐる。それは概念的なる無限ではなく場所的なる共通者（τὰ κοινά）であつた。凡ての物體はこの場所の中にあつてそれぞれに固有なる第一の場所をもつてゐるわけである。各々の事物は場所を所有するが、宇宙は場所をもつのではなく、場所そのものであつたのである。

要するに場所は二重の血緣關係を、即ち一方では無限者と、他方に延長に對して關係を有するといはれ、この關係を解明するため近代の學者は惡戰苦鬪したのであるが、アリストテレスは共通の場所と第一の場所とを說き、前者によつて場所を無限者から區別し、後者によつてそれを擴がりから明別することによつて場所の概念を論明しようとしたのである。

しかしこの二つの場所と二重の問題との相互關係は如何にして解決せられるのであるか。アリストテレスはこれを解決することなく棄て去つた、といふのはベルクソンの評論であるが果してさうであるか。ベルクソンはその「アリストテレスの場所論 Quid Aristoteles de loco senserit に於て次の如く結論してゐる。「それ故レウキッポスや、デモクリトスによつて時至らざるに物體から解放された空間を、アリストテレスは場所に置き換へようとした。即ち運動の無限なる舞臺を、有限なるものを有限なるものの中に包むことに置き換へようとしたのであつた。この操作によつて、彼は空間を物體の中に埋めたのみに止らず、また問題そのものをも、かくいふを許されるならば、埋めて終つたのである」。原子論者の「空虛なる空間」を具體的なる存在の場所に置き換へたのはプラトンであつた。アリストテレスの空間論もこれに從つて場所論として把握せられたが、運動の無限なる舞臺としての空間を有限なる物體の中に埋めてしまつたのが彼の特色であることはベルクソンのいふ如くであらう。さらにそれと同時にアリストテレスは問題そのものを埋めてしまつたといはれるが、それはアリストテレスによつて埋められても永久に埋められたのではなかつた。この問題を堀り起して新しい光の下に照し出さうとしたのは西田哲學であつたと見るを得ないであらうか。

この節のアリストテレスの場所論はその多くを前掲のベルクソンの研究に負うてゐる。私の依頼に應してこの書を見事な飜譯として殘し、戰場に沒せられた五十嵐達六郎君の遺業を埋沒から救ふことができれば望外の喜びとするところである。

三

以上によつて場所に關するプラトンとアリストテレスとの教說を略述し、それが如何なる結果に導くかを見たのであるが、多くの人々が場所は或ものであると語つてゐるのに、その何であるかを明かにした人がプラトンであるとすれば、場所が何故に然るべきかを論明しようとした人がアリストテレスであつたといふことができるであらう。そこには自ら問題の發展がある。場所論に關する限りに於てはアリストテレスはプラトンの後繼者であつた。原子論者の空虛なる空間に反對して場所を具體的なる存在または物體に卽して探求しようとしたところに此等の人々の共通の地盤がある。アリストテレスにとつて何らの働きも力もないものは絕對に存在し得ないものであつた。現勢的にせよ潛勢的にせよ何かの働きに屬するもの以外には存在の種類が考へられず、空虛な空間はこの兩者を缺いてゐるからそれは全く存在し得ぬものと考へられざるを得ない。またアリストテレスにとつては存在するといふことと限定をもつことは同意義であり、存在するものは或は性質によつて、或は大さによつて、或は樣相によつて規定せられることなしにはあり得ないのであるから、空間が完全に空虛である限り存在することは出來ないのである。從つて場所は物體に先立つて存在するものではなく、物體から或はむしろ物體の秩序と配置とから生れたものであらねばならなかつた。この意味に於てプラトン及びアリストテレスの場所は空間でなくして、コーラであり或はトポスであるべきことは明白である。

プラトンのコーラは事物のそれに於てある場所であり、事物はそれに於てあることによつて存在する事物となり得るのである。プラトンは之を時として「さ迷へる原因」と名づけたが、たとへそれがさ迷へるものであるにしても存在の一つの原因であることに變りがない。アリストテレスは場所を原因とは考へなかつた。少くとも彼の常に稱へる四つの原因の中に數へられてゐないのである。しかし彼にとつて何の働きも力もないものは存在ではあり得ないから、場所も一つの存在であるからには或意味に於て力をもち働きあるものでなければならなかつた。尤も場所は物體を離れて存在し得ぬのであるから場所の働きはその實、物體の働きであるとも考へられるが、しかしそれにしても場所が場所として考へられる以上はそれ自らの存在をもち働きを有たねばならぬはづであらう。反之プラトンのコーラは原因であるがそれ自ら

何の力をも有せず、たゞ他から働きを受容れるものにすぎない。受容を能動に對して一つの働きと見るのはアリストテレスの思想であつてプラトンのものではない。それ故に場所が原因的性格を帶びてゐるのはその言葉に拘らずプラトン的ではなく却つてアリストテレスの立場に於てであるといはねばならぬであらう。プラトンに於ては場所の何たるかが明にせられたが、アリストテレスに於てはその何故に然るべきかが論明せられたと前述したのもこの理由によるのである。

さてプラトンのコーラは前節にも論じたやうに決して質料ではないが、質料と解せらるべき多くの要素をふくみ、アリストテレスもさう解釋することによつてプラトンから離れたが、場所を質料に近く構想することは、それを擴がりとするか或は無限定なる、そして不定なる或ものと見なすかの孰れかに結末せざるを得ないやうである。實際プラトンもコーラの本性はその不定性にあり、たえず動搖し振蕩せられるところにあると見てゐる。そしてベルクソンも云つたやうに無限とは任意の大さより大なるものであり、不定とは任意の大さに等しいものをいふ（同書六一頁）のであるから、プラトンの場所は無限定と場所とを同一視したものと批難せられねばなるまい。場所を不定と同一視することは必しも場所の意義を不明ならしむる所以ではないとしても場所を場所として眞に把握したものでないと云はるべきであらう。

さらにプラトンに於ては場所は他の事物をそれに於て存在せしむるものであるが、場所はそれ自ら何に於てあるか。これに對する答へとして場所の場所ともいふべきものが考へられねばならぬ筈であるが、プラトンではそれは所謂無限の背進を誘致するものとして嚴しく排斥せられた。「パルメニデス」に於てイデアに關するアポリアが剔抉せられたのも專らこの論法によるのである。事物はイデアを分有することによつて存在性を得るが、イデアはさらにそれの分有すべきイデアを前提しなければならぬ。大なる事物は形相大に參與することによつて大となることができるが、形相大は何に參與することによつて大となり得るのであるか。この問題はプラトンにとつてアポリアを與へるものであつてもエウポリアを開くものであり得なかつた。それと同じやうに場所の場所といふが如きことは彼にとつては解き難き迷路に人を誘ふものにすぎなかつたであらう。

アリストテレスはこの問題を第一の場所と共通の場所とに區別することによつて解かうと試みてゐる。そして

前者によつて場所を物體の擴がりから區別し、後者によつて場所を無限定なるものから明別してゐることを既に我々は前節に於て學んだ。アリストテレスの場所は物體の延長と異るとともに、單なる無限定とも峻別せらるべきものであつたのである。少くともアリストテレスの場所は不定なるものと同一ではなかつた。このことは必しも彼の場所の概念を明確ならしめたといふわけではないが、少くとも彼はプラトンの如く不定なるものを不定なるままに放置して置かないだけの努力を拂つたといはねばならぬであらう。殊にアリストテレスに於て高く評價せらるべきは、場所を包むものと包まれるものとの關係に於て規定したといふことであらう。物體の場所も、それの擴がりの終るところにではなく物體を包むものの內表面に於て求められた。このことは勿論、事物とこれを包むものとを假定することによつて始めて可能なのであるから、場所はさらにそれの於てある場所を前提することによつてのみ成立する。アリストテレスにとつては場所がさらに何らかの場所に於てあることは困難なるアポリアを齎すものでないどころかむしろかくあることによつて場所は始めて場所であることができるのである。それは無限の背進といふ論理的困難をもたらすものでなく、却つて場所の論理を正當づけるものなのである。ベルグソンはアリストテレスがこの問題を解決することなく棄て去つた、もしもそれを自覺してゐなかつたとすれば、アリストテレスは確かに非難さるべきであらうと云つてゐるが（一三三頁）、しかしアリストテレスは之を自覺するとしないとに拘らず、その解決の方角に向つてゐる。否そこには既に一つの解決が與へられてゐるのである。それを自覺しなかつたベルグソンこそ却つて難ぜらるべきであらう。

しかしアリストテレスの批難さるべきは實は一つの他の點にあつた。場所の場所といふ思想は一つの場所と他の場所との關聯を言表はすものでは勿論ない。第二の場所は包むところの場所であり、第一のそれは包まれる場所である。この二つの場所の關係はいふまでもなく包むものと包まれるものとの關係である。そしてこのやうな關係に立つものは同一次元にあるものでなく高次の次元に於てつらなるものでなければならぬ。そこにアリストテレスの階層的なる組織が考へられねばならぬ理由もあるのである。しかしこの階層的結構はもしそれが客觀的存在に於て定立せられるならば次の如き困難に逢着しなければならぬ。階層は無限に多くであるか又はたゞ包む

ものと包まれるものとの一層に限定せられるかの孰れかでなければならぬ、それが無限であることは論理的なる背理ではないが、少くとも無意味であり、また後者の如くたゞ一層の關係に止ることは事實の許さぬことである。アリストテレスはこの宇宙を最高の共通的場所と見てその外に別の宇宙の存在することを斷然として拒否してゐるが、今日の天文學では宇宙の外に宇宙の存在することも實證せられまた境界のあるところにはその外に他の世界の豫想せらるべきことも論理の必然であらう。場所の場所といふ思想は存在の次元に於ては結局プラトンの恐れたやうにアポリアに陷るより外にはないのではないかと考へられるのである。

場所の場所とは畢竟存在的事物に於ては求め得べきものではない、所謂る階層的組織も結局はこの困難を救ふべき結構ではあり得なかつたであらう。それは單に次元を異にするのみでなく存在を異にせねばならぬ。場所の場所をなすものは客體の世界に於てではなく、主體的次元に於て求めらるべきものであつた。場所を包むものは單なる存在ではなく主體的なる作用の場面に於てのみ見出さるるのである。包むものは包む働きをあらはしてゐる。包まれたものは物體であるが、これを包むものは單なる物體であることができない。それはまさしく働きであり、作用であり、作用の作用でなければならぬ。作用の作用に於てこそ無限の背進は單なる背理でないのみかむしろその本質をあらはすことができる。自覺の本質は自己が自己自らを知るところにあつた。自己が自己を知るところに知ることの本質が横はり、その進行は背進でなくして前進であり、その論理は背理ではなくして眞理であるのである。

場所に關してこのやうな論索の道をとつたものが西田哲學であつた。西田哲學にとつても場所は事物のそれに於て存在すべき或ものであつたが、事物が場所に於てあることは何を意味するのであるか。事物が場所に於てあるとするならば場所は何に於てあるのであるか。この問ひは西田哲學に於て正面から問はれてゐないがそれを明かにすることは西田哲學の場所の根本性格を規定することになつてゐる。西田哲學の場所はプラトンのそれと同じく一種の非存在であつた。存在しないもののさらにその場所をたづねることは無意味だとも考へられるが、無の場所は場所の無と同一ではない。絶對無について尙その場所をたづねることは問題を重複することではなく、無の性格を明かにする所以でなければならない。アリス

トテレスはこれを包むものの性格に於て規定せんとしたがそれは場所といふ存在を――殊に彼に於ては事物性を有する點に於て西田哲學の場所と正反對である。しかしこれらの點に立入る前に西田哲學に於て場所とは如何なる意味をもち、何の役目をなしてゐたかを瞥見しよう。

西田哲學の存在は個體であつた。アリストテレスの存在も個別的事物であるが、しかしアリストテレスではそれは主語となつて述語とならぬものであつた。主語はその中に多くの屬性を內屬せしむる中心點としてのみ意味をもつものであつた。しかるに西田哲學の事物は述語に於て存在するところのものである。主語は個體であり、述語は一般者であるが、主語が述語によつて賓辭づけられるのは、個體が一般者に於て存在することを意味するに外ならない。これを裏からいへば一般者が自己を限定するところに個體の存在が得られるわけである。この花は赤いといふのはこの花に赤いといふ屬性が附け加はるのではなく、赤といふ一般者が自己を限定してこの花となることである。赤い花の存在はかくの如き判斷的一般者によつてのみ可能なのである。そして判斷的一般者はさらに場所的一般者にまで發展せざるを得なかつた。判斷の述語面が場所として把握せられることによつて西田哲學は一段の進歩をなしとげたのである。一般者はそれが一般的である限り多くのものをその中に包み、これらをその中に於て存在せしむるところの或ものであるべきである。

そこで個物と一般者との關係如何が問題となり、それはこの兩者が互に矛盾しながら同一であること、卽ち矛盾的自己同一性によつて一應は說明せられ得るが、しかし一般者と個體とは嚴密には矛盾するものではない。この關係はむしろ次の如き見方から考察せらるべきものであらう。一般者が個物と同じく實有であるならば、個物が一般者に於て存在することは不可能とならざるを得ない。西田哲學の一般者は一般的概念でないことは勿論一般的存在者でもなく、一般に存在するものでなくして一種の非存在であり、無の場所であつた。それで個物が一般者に於てあるといふのは個物が一般者を媒介として他の個物と相對するといふことであり、個物と個物とが一般者に於て對面することである。ところが一般者は場所的無であるから之を媒介とすることは媒介者なき媒介を媒介とすることであり、個物は端的に他の個物と對峙することとならざるを得ない。個物は單獨に個物として存在することなくそれは他の個物と相對することによつて

初めて個物となり得るのである。我は汝に對して我であり、汝は我に對して初めて汝であり得る、そして我と汝とがかくの如き關係に於てすることが卽ち場所的無によつて關係づけられてゐることである。個物が一般者に於てあることは一般者が自己を限定して個物となることである。しかしそれは決して一般的なるものから個物が引き出されることではなく、一般者が自己を限定することであるが、一般者は抑々無であるから、この限定は限定するものなき限定でなければならない。換言すれば一般者の自己限定は個物が個物自らを限定することであり、個物が個物としてそれ自らの存在を確立する所以である。西田哲學の出發は存在の探求にあつたが、それは遂に個物の存在の確立に到達した、そしてこのことに於て最も重要なるは場所的無の思想である。それが個物をそれに於て存在せしむることは、それによつて個物の存在が可能となり、それなくしては個物は勿論一般に存在が存在として成立し得ないことを示す。しかも場所はそれ自らとして無である。プラトンのコーラも非存在であるが、プラトンに於てはそれは非存在といふ存在であつた。「ソプイステス」篇に於て非存在は常に「他」として考へられ、「プイレボス」篇に於ては「無限定」として規定せられたやうに、「テイマイオス」のコーラは空虛であるが他はそのものに非ざる一つの存在であり、無限が限定なきものでありながら尙一つの存在たるを失はぬやうに、コーラの空虛性も決して非存在を意味してゐない。それは空虛なる空間であるが、しかも場所といふ一つの存在を示してゐる。しかるに西田哲學の場所は嘗に非存在であるのみでなく、絕對的なる無であつた。一般者は一般的であるかぎり特殊なる事物ではないが、尙一般的なる內容をもつと考へ得るであらう。赤一般は單なる槪念でなく內容ある一般でなければならぬが、しかしかゝる一般者は判斷的一般者であつて自覺的又は叡智的なる一般者ではない。個物の於てある一般者は相對的なる空間でなくして絕對無でなければならない。

この點に於てプラトンのコーラは西田哲學の場所と必しも同一ではないことがわかるであらう。前に明かにした如くプラトンのコーラは質料ではないが、それが質料と解せらるべき多くの要素をふくんでゐる。ブロシヤールのいふ如く、プラトンもアリストテレスも決して空間を以て質料を說明したのではなく、逆に質料を以て空間を說明したのであるとするならば、場所は質料でなくとも質料的に解せらるべき多くのものを含んでゐる。質料

の特性は虚無性にではなく不定性にあつた。それは未だ定性を有せざるものであるが故に非存在であるが、やがて何らかの規定をうくべき或るものであることに於て存在でなければならぬ。無限なるものは無なるものでなく、たゞ限定なきものであり、それ故にやがて限定せらるべきものであつた。然るに西田哲學の場所には少しも質料的要素は認められない。それは存在のやがて規定せらるべき質料ではなく既に一つの現實なる存在である。それは存在に先だつ可能性ではなく存在を超越しながら現實に存在をして存在せしむる或ものである。それは存在の一つの在り方ではなく、存在そのものの根柢をなすところの力である。卽ち單に存在せしめられた存在ではなく、存在をして存在たらしむる或ものでなければならない。

プラトン及びアリストテレスに缺けたものは主體的なる立場である。コーラは質料であるよりも空間であり、空間であるよりも事物の事物性またはその客觀性であつた。存在をどこまでも客體化してノエマ的に把住されたものがコーラであるに對し、西田哲學の場所は反對に主體の側面に深く入つてそこに存在の基盤を求めようとする。プラトンではイデアの基柢が精神であり、物體のそれがコーラであるに對し、西田哲學に於てはコーラにして同時に精神的なるものが凡ゆる存在の基盤をなしてゐる。場所は單にそこにある空間でなくして、有るものをそこにあらしめ、それ故にそれ自らは有らぬところの主體的なるものである。それは精神的であつても觀念的ではなく、主體的であつても決して主觀的ではなかつた。それは空間があるといふ意味に於て有るものではなく、凡ゆるものをそこにあらしめるものとしてそこにあるのである。それ自らは存在でなく、存在をして存在たらしむるものとして、そこにあるところのものである。それ故に西田哲學の場所は物質的空間でないことは勿論、單なる存在の場所でもなく、謂はば叡智的場所ともよばるべきものなのであらう。プラトンのイデアも叡智的であり從つてそのあるべき場所もヌース的でなければならぬが、その叡智は himmelisch ではあつても決して主體的ではなかつた。西田哲學の超越は外へのそれではなくして內への超越であつた。場所は存在の場所として、存在を內に超越したものであつたのである。

プラトンの後期の哲學を形相の學であるよりも形成の哲學として見ようとするのが私の年來の希望であるが、「ティマイオス」に於ては形成の概念は殊に重要なる位置を占めてゐる。それは宇宙の生成を論じたものである

が、プラトンの生成は實は形成であるに外ならなかつた。形成に於ては形成せられるものとその範型とが豫想せらるるが、就中形成する人が中心をなしてゐる。プラントに於てはそれはデミウルゴスであつたが、プラクシスをポイエシスと考へる西田哲學に於てはそれは果して何であつたであらうか。個體が個體として存在するのは一般者の自己限定によつてであるが、西田哲學に於ては一般者は無の場所であるから、それが個體を形成するとはいへないであらう。個體を形成するものは個體自らであつて他のものではあり得ない。個體が自らを個體として形成することが卽ち一般者の自己限定に外ならぬのである。その意味に於て一般者は個體を存在せしむるとともに個體も亦一般者を限定するといはねばならぬであらう。さて一般者の限定は限定するものなき限定であるが、個體を限定するものは何であるか。それは身體であつて恰も一般者の身體が場所である如く、個體の場所は身體であると考へられるのである。身體とは單なる肉體ではなく個體の個體性を構成するところのものでなければならない。身體なき個體は單なる個性であつても決して具體的なる個體ではあり得ぬであらう。一般者が現實に働くのは身體を通してであり、個體が個體に於て働くのも勿論身體を以てしてである。個體が自己を限定し、そこに具體的なる存在を形成するのはそれ故に身體であるといはねばならない。

アリストテレスのマテリアは生成の過程の分析から得られたものであり、プラトンのコーラは存在の成立條件として構想せられたものであるとするならば、西田哲學の「場所」は存在の根據また理由を明かにしたものであるといふことができるであらう。個體的存在が何によつて存在し得るか。存在が個體としてあるのは何によつて然るを得るのであるか。それを問ひそして答へんとするのが西田哲學の志すところであつた。存在がマテリアから生成すると考へるのはアリストテレスの立場であり、事象がコーラに於てあることを論じたのがプラトンの哲學であるとするならば、西田哲學はそれが場所に於てあるが故にそれによつて成立する所以を明かにせんとした。單に或る場所に於てあることが卽ち存在の根據となることはできぬ。場所に於てあることが何故に存在の理由となるかはプラトンによつても解明せられなかつた。一つの場所に於てあるのは空間の一部を分有することであるが、それが如何にして可能であるかは問はないとしてもそれが何故に存在を可能ならしむるかは重要なる問

題でなければならぬ。空間が若し一つの存在者であるならば、事物が空間に於てあるといふことも例へばプラトンの「パルメニデス」第一部に於て吟味せられたやうに、分有に關する多くの難問を惹起するのみならず、それが何故に事物の存在を可能ならしむるかについても不可能の問題を提起するものといはねばならぬ。しかるにプラトンのコーラはたとへアリストテレスの質料と同一ではないにしても尙質料的であり、或は少くとも存在的であつた。そしてそれがさうである限り遂にこれらの難關の前にたたずまざるを得ぬであらう。西田哲學の場所はこれに反して無の場所であり、絶對無の原理である。場所が存在の根柢をなすのは、存在が他の何ものによつてでもなく、それ自らによつて、如何なる他のものに於てでもなく、それ自らの中に存在することをあらはしてゐる。個體が場所に於てあることは個物が眞にそれ自らによつて存在することを明かにしてゐる。西田哲學の場所はそれ故に存在が何によつてそれ自ら存在であり得るかを明かにしたものであつた。そしてそれがまた西田哲學をしてプラトンやアリストテレスの立場からも區別せしめる所以のトポスであつた。從つて西田哲學に於て「場所」を論ずることはこの哲學の根本思想の一つを明かにするとともにそれが他の種々なる哲學から區別せらるべき場所（トポス）を明かにする所以であるといはねばならない。

彙報

哲學會公開講演會

十月二十七日（土）　午後一時半　法經第四教室

京都帝國大學教授　矢田部達郎氏　精神生活に於ける思考活動の位置

第三高等學校教授　相原信作氏　課せられてゐるもの

「哲學研究」發行遲延ノ爲紙上豫告ヲ中止セリ